

## その1

### 万葉・古と今の出会い



(本文) 新年乃始乃 波都波流能 家布敷流由伎能 伊夜之家餘其騰

(訳文)「新(あらた)しき 年の初めの 初春の 今日降る雪の いや重(し)け吉事(よごと)」

(口訳) (新しい年の初めに立春が重なった今日降る雪のように、ますます重なれ、  
良い事よ) 大伴家持(巻 20・4516)

万葉集については専門外の私が、このような連載を書くために頭を悩ませることになるなどとは思ってもみなかった。恥ずかしながら、10年ちょっと前までは、万葉集についてはまったく無知だった私が、なぜこのようなことになったのか、まずはそこから書きはじめなければならないだろう。

私と万葉集の出会いはきわめて明確で、2007年は7月のこと、友人の番組制作会社社長からの電話で始まった。社長とはテレビ制作の現役時代からの付き合いで、かつては彼の持ち込み企画でNHKスペシャルのドキュメンタリー番組を制作し話題になったこともあったが、くたびれかけた定年後の今回は番組変わってミニ番組シリーズ制作の依頼だった。「ミニ番組なら、まだできるかも」、ということで話を聞いてみると、テーマが、全く想定外の「万葉集」だという。彼の長年にわたる執念の企画で、「念願かなって採択されたから是非頼みたい」という。私が取り組んできた分野とは全く違うし、そもそも、「これまで一度も万葉集を読んだことがない」と、即お断りをした。それで話は終わったと思った数日後、再度電話が入る。「万葉集については何も知らなくていいから、引き受けてくれないか」という奇妙な再オファーだった。そう言われると無碍に断ることもできず、せめて努力の証は見せなければと、3日間の猶予をもらって図書館に籠ることにした。しかし、3日も必要なかった。惚(ほ)れると惚(ぼ)けるの境目が分からなくなった齢67にして、女性にも経験したことがない一目惚れをしてしまったのである。早速社長に電話して、「ぜひやらせてほしい」と、今度はこちらからお願いし

たのは言うまでもない。その番組が、月曜から金曜日まで毎朝 5 分間のミニ番組シリーズ「日めくり万葉集」だった。監修を当時慶応大学藤原茂樹教授と奈良女子大学大学院教授で現在高岡万葉歴史館坂本信幸館長にお願いして（坂本館長には、引き続き本稿の監修もお願いしている）、翌 2008 年 1 月から放送開始、それから 4 年間、自転車操業のようなペースで 480 本もの番組を制作した。以来万葉集にぞっこん、今に至るまで入れ込み入れ上げ入り浸っている。



まさに老いらくの恋だった。歳をとってから出会ったのがよかったのだろう。枯れ木が水を吸い上げるように、乾いた砂が水を吸い込むように、万葉集が干からびた心身の隅々まで染み渡ってくる。そんな門外漢の私が、厚かましくも番組制作を引き受け、また、おこがましくもこのような連載まで書くことになったのは、万葉集は、「いつになってから始めても遅すぎることではない」、という良き「生きた見本」であることをお伝えしたかったからである。今からでも、というより、今だからこそ万葉集を！まさに、「万葉集ナウ」が、この連載のねらいであり、このサイトに、そんな奇妙なハンドルネームを付けた由縁でもる。

私が一目惚れした万葉集の魅力は、概ね 2 つある。

その 1 つは、言うまでもなく万葉集は現存するわが国最古の壮大な歌集だが、それは単なる歌集ではなかったこと。万葉集は、相聞歌と挽歌、そして、それ以外の多くを占める歌、雑歌の 3 部で構成されている。ザツな歌ではない。宮廷の行事から庶民の暮らしまで種々雑多な歌をいう雑歌(ぞうか)である。つまり、この 3 大部立そのものが、万葉びとの喜び、悲しみ、そして様々な場面を歌った「心と暮らし」のドキュメント、古びとのドキュメンタリーになっていることを知った。すなわち、万葉集は、私が苦手とする単なる古典文学ではなく、現役時代からこれまで志向してきたテーマそのものだったのである。

そして、もう1つの魅力、というより私を強く惹きつけたものは、万葉集全 4516 首の最後に置かれた「新しき」の歌だった。最終的に万葉集を編纂したとされる大伴家持の絶唱である。家持は、なぜこの歌を万葉集の最後に置いたのだろうという思いがふっと湧いてきた。番組制作と図書出版に携わった私の経験則のみならず、作品の最後、物語のエンディングをどうまとめるかは、ものづくりのポイントであることは言うまでもない。そこで、「新しい年の初め」というこの歌だが、一見すると、エンディングというよりオープニングに相応しい歌に思える。実際、その後「日めくり万葉集」480 本の制作にあたって、真っ先に取り上げたのが、この歌だった。シリーズの最初に、万葉集の最終歌を持ってきたのだが、そんなオープニング向きの歌を、家持は全 20 巻の最後に置いた。なぜか？

そして、何より私をとらえたのは、この歌は万葉集の最終歌にとどまらず、家持最後の歌でもあったことだった。つまり、万葉を代表する歌人家持が、この歌をもって、「歌を断った」のだ。それも、15 歳で歌を詠み始め、42 歳でこの歌を詠むまでの 27 年間にわたって、万葉集に 470 余首と最も多くの歌を残した家持が、それから 68 歳で亡くなるまでのほぼ同じ 26 年間、1 首も歌を残していないのである。これほどの歌人が、その間歌を詠まないわけがない、詠みたくならないわけがない。とすると、歌は詠んだけれど、残っていないのか、或いは、残さなかったのか？もしかしたら、どこかに家持の知られざる歌が埋もれているのか、いずれそれらの埋もれた歌が陽の目をみることがあるのか？もし、いつの日か、幻の家持歌集が出てきたとしたら……まるで夢のような話だが、それは幻、かなわざる夢だろう。と、すると、やはり家持は、敢えて「歌を断った」のか？自ら望んで「歌わぬ人」になったのか？なら、その理由は？

今だに分からないことが多い万葉集の中でも、特にこの「歌わぬ歌人」の謎がいつも心に引っかかり、その後それが私のテーマとなる。そこで自分なりの説を組み立て私なりの物語を作って、いずれ最終歌「いや重けよごと」のタイトルで舞台などに展開していくことになる。つまり、「もう一つの大伴家持物語」である。それについては追々書いていくことになるが、1 つだけ、あらかじめ明らかにしておこう。



その1つとは、この歌の31文字（みそひともし）の1字だけを置き換えてみる。そうすると、この歌へ込めた家持の思いの一端が、より分かりやすく伝えることができることに気がついたのだ。その1字とは、「新しき年」の年（とし）の「し」を「き」に換える……と、年は、時（とき）、または、時代（とき）と読み替えることができる。すると、まさに古と今が出会い、万葉の時代と現代が見事につながることで、この歌は万葉から令和新時代への呼びかけになるのである。

「新しき 時代(とき)の初めの 初春の  
今日降る雪の いや重け吉事」



「万葉集ナウ」と名付けた通り、この連載は、まず冒頭に万葉秀歌を1首ずつ取り上げ、その歌を手がかりにできるだけ今日的な、つまり、ナウな視点で、万葉集の古と今を結びつけ、10数年前の私と同じように、万葉集について知らない方々にも興味をもってもらえるようなものになったら、というのが、自称「万葉集宣伝係」の願いである。

なお、冒頭で紹介する歌には、できるだけ万葉仮名による原文を添えるので、暗号を解読するごとく、千数百年前からのメッセージである本文の読み解きにチャレンジしてほしい。もっとも万葉集研究の専門家でもまだ解読できない歌が10数首あるという。12首しか歌を残していない額田王の歌の1首は、いくつかの解釈はあるが、いまだに誰も解読できていない。その歌を示そう。これにもチャレンジしてみたら！

????????????  
「莫囂圓隣之大相七兄爪謁氣

我(あ)が背子(せこ)が

い立たせりけむ

巖櫃(いつかし)が本(も)」

額田王(巻1・9)

